［研究ノート］

関宿周辺の焼き物の流通について―江戸時代中期から明治期まで―

鈴木敬子

一、はじめに

平成三十年は、明治に改元して一五〇年の節目にあたったため、国、県、市町村の美術館・博物館などで、様々な展示や企画が実施された。当館でも企画展「文明開化の力―わたしたち、江戸時代を卒業します！―」を実施し、産業振興と民衆の立場からみた文明開化を内容とした展示を行った。この展示を行うにあたり、下地にあったのは平成二七年度に実施した企画展「海路から広がったやきもの―近世以降の関東―」である。この企画展の調査において、幕末から明治期における焼き物業界は製品・流通ともに大きく変化し、現代への道筋をつくったことがわかった。幕藩政治の束縛から放たれ、全国へ海外へと販路を広げた人々のエネルギーに触れ、焼き物以外でもこのような流れがあったはずだ、との思いから調査を行い、今年度の展示にこぎつけたのである。

本稿では、三年前の企画展に関わる調査を中心とした報告を行う。当時、焼き物の流通に関して感じていた疑問点を解き明かせればと思う。

二、関宿周辺で明治期に新たに流通したもの

明治期になって欧米諸国の先進技術が導入され、舟運関係では、明治三年（一八七〇）に古河―東京間に外輪蒸気船「利根丸」が就航する。一〇年（一八七七）には「通運丸」が就航し、それまでの河岸場の多くは寄港場として流通の拠点になっていく。そのため、外輪蒸気船の燃料である石炭は、明治初期に流通し始めている。

また、明治五年（一八七二）に横浜・馬車道で始まった街灯は、都市部ではガスを燃料とするガス灯だったが、地方では石油ランプが多く使われた。そのため明治中期には、石油の流通も始まる。霞ヶ浦の北浦にある荒野平左衛門河岸（鉾田町）における明治九年（一八七六）の移入品の中には、石炭油（石油）が見られる。一〇年後の明治一七年（一八八四）の鉾田河岸移入額(1)で石油は、急速に増加している。明治一六年（一八八三）の野田市瀬戸河岸「出入船舶物品地名表」(2)の積み出し荷物の中にも、石油箱の記述が見られる。また、茨城県境町の河岸問屋、小松原家の文書のうち明治二九年（一八九六）の「東部鉄道会社創立嘆願書」(3)の中にも、輸入品の項目のトップに石油の名前が見られ、石油の必要性が見受けられる。その他、「足利地方輸入品駄数調」(4)でも明治一六年（一八八三）に舟運、陸運双方で石油の記述が見られ、関東内陸部でも明治の早い時期に石油ランプの定着があったことがわかる。

明治中期になると、農業肥料に変化が現れる。江戸時代は房総を産地とする干鰯や鰯〆粕が肥料として用いられていたが、中期には、鰯の漁獲量の減少に伴い、北海道産の鰊〆粕が用いられるようになる。また、明治二三年（一八九〇）には、東京人造肥料会社が設立され、国内初の化学肥料・過リン酸石灰が生産された。『千葉県東葛飾郡史』(5)によると明治二七年（一八九四）頃から化学肥料が販売されており、千葉県は早期に利用を始めた地域にな

る。日露戦争後の明治三八年(一九〇五)には、満州の特産物である大豆を搾油後に固めた大豆粕が安価な肥料として普及した。

今回取り上げる焼き物について、江戸時代までの関宿周辺の流通に関わる文書類には、「焼き物」「瀬戸物」という品目はあまり見当たらない。前出の荒野平左衛門河岸の明治九年(一八七六)の移入品の中には瀬戸物、明治一八年(一八八五)の境町の小松原家文書「利根川汽船通運丸荷物運賃改正表」(6)に陶器類、明治二二~三年(一八八九~九〇)の野田市船戸河岸の扱荷と手数料を記した「船戸支店益金配当勘定」(7)に「セト物」「益子焼セト」という品目が登場し、明治初期から瀬戸物が流通を始めたことがわかる。

ちなみに瀬戸物とは本来、瀬戸の焼き物(瀬戸焼)を省略した言葉だったが、多く流通していたため、江戸時代に焼き物と同じ意味で使われるようになった。瀬戸は古くから陶器の産地で、江戸時代は美濃焼も瀬戸焼として販売していたこと、江戸中期からは瀬戸・美濃焼が磁器の産地にもなったため生産が増したことなどによって一大産地になった。戦前くらいまでは、関西以西では焼き物のことを唐津物と呼び、中部以東では瀬戸物と呼んでいた。

三、江戸時代から明治期に至るまでの焼き物に関する様々な変化

1.産地から見た焼き物

(1)江戸時代の焼き物

焼き物の産地は国内の様々な場所にある。基本的には焼き物に適した粘土が採れることが必要で、焼き物の種類である土器・炻器・陶器・磁器で産地が分かれている。江戸時代は有田焼(伊万里)や瀬戸焼・美濃焼など磁器の産地、唐津焼、瀬戸焼・美濃焼、萩焼など陶器の産地、信楽焼や備前焼、常滑焼など炻器の産地、三州瓦、今戸焼など土器の産地での生産が盛んだった。その中でも磁器は彩りが美しいため、贈り物として利用され、産地を抱えている藩は、財政補填もあり、窯元の保護を行った。特に、有田焼を抱える佐賀藩と瀬戸・美濃焼を抱える尾張藩は、江戸時代後期に藩陶器専売制を確立させ、収益の藩独占を図った(8)。そのため江戸時代、磁器は高価なものであり、武士階級を中心に使用されたものの、民衆へ広まることはなかった。

藩の指定商人はその地域の市場から各産地へ主に船を用いて販売を行った。江戸では、産地の市場から入った品物は中央市場に入る。江戸の中央市場は、元禄七年(一六九四)に江戸の問屋商人・大坂屋伊兵衛が中心となり「江戸十組問屋」が結成され(9)、品物はその問屋に集まり、神田今川橋の瀬戸物問屋へ回り(10)、その後仲買の手から卸(小売りと引売り)へ、売れ残りを露天商が市などで販売していた。

関東内にも江戸時代に焼き物の産地が興った。初期に今戸焼(東京都)、中期に笠間焼(茨城県)、後期に小砂焼(栃木県)・松岡焼(茨城県)・益子焼(栃木県)・飯能焼(埼玉県)などである。笠間藩が笠間焼、水戸藩が小砂焼、黒羽藩が益子焼の保護をしていた。

(2)幕末の産地の動向

幕末の開港に伴い、保護下の焼き物の販売先として各藩は海外へ目を向ける。慶応三年(一八六七)のパリ万国博覧会に佐賀藩から有田焼が出品、同時期に瀬戸焼は輸出用磁器の生産を始める。また笠間焼は猿島茶の海外輸出に使用する茶壺の生産を行った。

小産地が連なりひとつの窯業地を形成している美濃焼は、それぞれに生産品種の分業が行われ、専業化が進められていった(11)。また、瀬戸周辺では、印判染付というステンシルのような型を利用した文様付けの試みが始められ、近代的な工業化・大量生産の先駆となっている(12)。

一方、国内の販売では「江戸十組問屋」を通さない陸路を使った販売が広がり、関東内でも紀州商人、美濃商人、京商人、江戸商人が競合し、見本による焼き物販売が行われていた(13)。

(3)明治期の産地の動向

幕藩体制の崩壊によって藩専売制がなくなり、江戸十組問屋も解散したことによって、焼き物の販売は自由になった。印判染付の技術が完成し、大量生産が可能になったため、瀬戸・美濃焼が、飯椀に代表される民衆のための食器として磁器を全国的に販売した。続いて他の磁器の産地も印判染付で庶民向けの大量生産、大量販売を始めた。輸出用のコーヒーカップや壺や花瓶などの磁器の製造も始め、万国博覧会に度々出品し、美術工芸品製作にも力を入れた。

美濃焼は、それまでの分業化をより進め、高田村は徳利、笠原町は飯茶碗、妻木村は白コーヒー碗など同業組合によって専制権が決められ、大量生産ができる体制を作っていった。販売では、明治中期に東海道線が全線開通し、中央線も後期に多治見駅が開通したため、荷物を大量に遠くまで早く運べるようになり、販路がより拡大していった。

有田焼窯元の「香蘭社」や明治二〇年(一八八七)代に創業し、アメリカで和陶磁器を販売する森村陶器(現・ノリタケ)、江戸時代後期に創業した京焼の橘屋吉兵衛(現・たち吉)など、会社組織による製造販売もこの時期に始まっている。

こうした日常雑器の普及と輸出用美術工芸品の製造とともに、電線の絶縁器具である碍子やTOTOやINAXなどの洗面具に特化した会社など、工業用の陶磁器会社も興隆してくる。

関東地方では、美濃焼の行商人・田中友三郎が笠間焼の販売網を東京まで広げ、益子焼は笠間焼とともに猿島茶の茶壺の製造販売、海外への茶器販売などを行って販売網を広げていった。

2. 庶民から見た焼き物

(1) 江戸時代に庶民が使っていた焼き物

江戸時代、関宿周辺の舟運等の文献からは当地での焼き物流通の記載が見られないが、近隣博物館で収蔵している民具としての焼き物や発掘出土品などによって、この地域でも様々な焼き物が使われていたことがわかっている(14)。

貯蔵容器としての甕や壺、瓶など、調理器具としての焙烙や行平鍋、すり鉢、こね鉢、片口、土瓶、徳利など、灯火具としての灯明皿、秉燭、瓦灯など、暖房器具としての火鉢、行火、湯たんぽなど、その他火消し壺や十能などが挙げられる。これらの道具は炻器、土器、陶器であり、磁器はない。

関東内の土器の産地としては隅田川沿いの今戸焼、栃木県岩舟町周辺(現・栃木市)、埼玉県深谷周辺など、陶器は江戸中期に開窯した笠間焼などがある。また、東北地方の産物も利根川舟運を使い、江戸へ流通していたため、江戸時代初期に創業している相馬焼も関東に流通していた。笠間焼や相馬焼で江戸時代に製造された焼き物は、土瓶、秉燭、火鉢、徳利、すり鉢、茶壺、油壺、水甕などであり、周辺の焼き物需要は満たしていたが、より広範囲への販売にはいたらなかった。ただし江戸時代後期、江戸市中でコレラの流行があり、煎じ薬を作るために直火にかけられる笠間焼の土瓶が流行ったようである(15)。

(2) 幕末から明治にかけて庶民が使うようになった焼き物

江戸時代、上級武士の間で使われ始めた磁器製食器類は、江戸時代中期に瀬戸・美濃焼で磁器製品の生産が始まって徐々に商人や下級武士へと浸透していき、幕末には農村部でも冠婚葬祭で使われるようになる。名主など豪農が祭事用として大皿や茶碗類、鉢類を用意し、村内で祭事の時に貸出しをして利用に供するようになった。便器や台所の流しから排水するための土管などの使用も増えていった。便器は染付磁器の鮮やかな色合いのものや、笠間焼、益子焼などの陶器もあり、水甕とともに、瀬戸物屋の店前に置いて販売されていた。瓦が民家で広く使用されるようになったのも明治期である。江戸では度重なる大火で、復興の度に板葺きや茅葺き屋根から瓦葺き屋根に変わっていったが、地方の商家や民家が瓦葺き屋根に変わるのは明治期になってからが多い。

また産地の動向でも記述したが、幕末の横浜開港以降、瀬戸・美濃焼の全国的な販売展開がさかんになったことにも起因し、すでに生活に根付いていた貯蔵用具や調理用具以外の、特に日常雑器と言われる御飯茶碗や湯呑み茶碗、各種皿類が販売され、使用されるようになっていった。

ところで江戸時代、特に海船において空荷での航行は、波の影響を受けて横転しやすく危険である。そのために重い荷を船底に積み、安定を取る必要がある。焼き物は水に濡れても問題のない重い荷であるため、船底の荷として最適であった。海ほど波の影響はないとしても、焼き物はかさのある重い荷であるため、舟運が適しているはずである。では、産地からどのようにして人々の手に渡ったのだろうか。その点について次の章で明らかにしたい。

3. 販売

(1) 江戸時代の販売

前述で江戸の中央市場は、江戸十組問屋が仕切っていたことを書いたが、その十組は次のようなものである。

・塗物店組(塗物類)／・釘店組(釘・鉄、鍋物類)／・内店組(絹布、太物、繰綿、小間物、雛人形)／・通町組(小間物、太物、荒物、塗物、打物)／・綿店組(綿)／・表店組(畳表、青筵)／・川岸組(水油、繰綿)／・紙店組(紙、蝋燭)／・薬種店組(薬種類)／・酒店組(酒類)

見てわかるように、この中に瀬戸物・焼き物という名称はない(16)。それでは江戸へ商品を流通していた上方の大坂はどうだったか見てみよう。大坂には江戸の十組問屋に向けて品物を送る「大坂二十四組問屋」(17)があった。その種類は下記の通りである。

・綿買次問屋／・油問屋／・鐵釘積問屋／・江戸組毛綿仕入積問屋／・一番組紙店／・表店(畳表)／・塗物店／・二番組紙店／・内店組(木綿類)／・明神講(昆布、白粉、線香、布海苔、下駄、鼻緒、傘、絵具類)／・通町組(小間物、古手、葛籠、竹皮、日傘、象牙細工類)／・瀬戸物店／・薬種店／・堀留組(青筵類)／・乾物組／・安永一番組(紙類)／・安永二番組(金物、鋼、鐵、木綿、古手、草履表、青筵、火鉢類)／・安永三番組(渋、櫓木、砥石類)／・安永四番組(打物、釘金、砥石類)／・安永五番組(煙草、帆木綿、布海苔類)／・安永六番組(指金、肥物、鰹節、干魚、昆布類)／・安永七番組(鰹節、傘、柳行李、白粉、砥石、木綿類)／・安永八番組(蝋店)／・安永九番組(木綿、灰、紙屑、針金、古綿、古手、櫓木類)／・安永追加九番組鰹節組・同東組(紙、木綿、綿類)／・同紅梅組(足袋、下駄、雪駄類)／・同書林組、同榮組(白粉、竹皮、木綿類)／・同航榮組(菱垣廻船問屋、書林、小間物、布、畳表、諸方荷次屋、／蝋、紙類)

この中には、「瀬戸物店」が加わっている。焼き物の産地は西に多くあるため、中部地方にある瀬戸・美濃焼などの産地以外は、大坂の市場に一度集まり、海運で江戸に運ばれていた。また、江戸でも神田今川橋の瀬戸物問屋があったことは前述の通り、絵図などでわかっているため、焼き物は明らかに江戸で普及していたはずである。

ここで注目したいのが、二十四組問屋の中の「安永二番組」の火鉢類の記載である。火鉢の多くは焼き物である。二十四組問屋は品物がだぶっている問屋も多いので、瀬戸物店でも火鉢を扱っていた可能性はあるが、安永二番組では金物や青筵とともに扱われているようである。

これらの品物の関連性がわかる「江戸荒物」という上方落語がある。大坂の商人が地元で江戸荒物という店を始めて慣れない江戸弁を使い、失敗してしまう話だが、その中に出てくる荒物屋には、たわしやホウキ、焙烙、すり鉢、水甕、荒縄、ハエたたき、扇子、火鉢など、庶民向けの安価な日常品が売られている。今でいうホームセンターのような店で、その中に焼き物である焙烙やすり鉢、火鉢などが売られているのである。つまり、江戸時代に一般家庭で使われていた焼き物は荒物屋で売られていた。「安永二番組」は荒物を扱う問屋だと思われる。

その観点で、江戸十組問屋の種類を見てみると通町組の品目に荒物が見られる。また釘店組の鍋物類も焙烙や行平が加わってい

た可能性が高い。前述の絵図(18)にも、神田今川橋の瀬戸物問屋街の外れに、水甕などの荒物の焼き物を販売している店が描かれている。

江戸から関宿周辺へは、江戸十組問屋から奥川船積問屋を介して、舟運で各河岸問屋へ(19)、そこから荒物屋へという流れである。旧布施村（（現野田市）元名主の後藤家文書の「享保より天保年中迄運賃駄賃調書」(20)内、江戸時代中期から後期にかけての「享保年中運賃之覚」「寛政年中運賃之覚」「天保年中運賃之覚」の文書に、利根川江戸川を通じて江戸に送られた品物の中に「荒物類」が見られる。荒物が何を示しているかは不明で、産地や出荷場所が記載されていないため確かではないが、焼き物が含まれている可能性もある。

天保七年（一八三六）の境町、小松原家の大福帳(21)の中に、荒物屋が送った筵包、瀬戸物籠、櫃という荷物の記載がある。戦前までの焼き物の梱包は、藁を用いた俵包であるが、筵を二つ折りにした叺に籾殻をつめ、藁で括った焼き物を入れて俵にしていたため、筵包と記載された可能性もある。また、瀬戸物籠という記載もあるため、籠で流通していたものもあるということである。品物名でなく、品物が入っている形状を記載していた場合、中身が何であるかを判定することができず、流通の記載からは、焼き物を追うことは難しい。

江戸時代に興った笠間焼や焙烙・火鉢・行火など土器を生産する今戸焼などは、民具として収蔵している近隣博物館も多い。江戸時代はもとより、戦前までは、これらの生活用具は、各家庭に必需品だった。

各藩は、領民の必需品が他領から購入され、他藩へ正貨が流れることを抑えるために、それらの品々の産業振興を進めた。後に、悪化した経済状況の改善のために正貨の獲得として藩外への販売を盛んに行うようになる。関宿周辺にこれらの焼き物が流通しているのは、実物資料が見つかることから明らかである。前述で幕末、関東内陸部は陸路による流通が盛んに行われていたと書いたが、それは取りも直さず、それ以前より舟運に依らない流通も行われていたことにつながる。

そこで、江戸時代の焼き物の販売について、関宿周辺の店舗の記録を追ってみたい。江戸時代初期の販売形態は、町場では定期的に行われる六斎市のような市であったが、江戸時代中期には多くの場所で店舗の形ができてくる(22)。宝永二年（一七〇五）の「町方軒別書上」(23)には、笠間町に荒物屋四軒、ぼてぶり荒物売一軒、ほうろく売一軒あったという記載がある。江戸時代中期から荒物屋が成立していたという貴重な資料である。

江戸時代末期の松戸宿職業構成について、天保七年（一八三六）以降に作られた『旧幕時代松戸宿旧絵図』に載っている「松戸宿家並絵図」(24)では、宿場内にある三二〇軒の内、荒物屋三四軒、瀬戸物屋二軒（兼業を含む）が確認される。

関宿周辺から少々離れるが、桑川村（現・江戸川区）の天保一三年（一八四二）の「商売家取調書上帳」(25)によると寛政年間（一七八九～一八〇〇）に村内で農間余業として商売を始めた七軒中三軒が荒物雑貨商、それ以降は荒物屋と別職種の兼業が一軒増えている。荒物屋は全一四軒の内の四軒で、最も増加した職種だった。

日光街道沿いになるが、嘉永二年（一八四九）の春日部宿の職業構成(26)では、商店問屋一一四軒中、荒物商が二三軒と他の職種から群を抜いて多く、荒物の需要が多かったことがわかる。

これらの資料から、特に農村と隣接する町場は荒物屋が多い。

一方、神社の境内などでも市が盛んに開かれていた。土浦市の鷲宮神社では毎年一〇月数日間「大市」が行われ、享保二〇年（一七三五）の売上高、合計八二七両二分のうち、荒物の売上が八〇両強、瀬戸物が二～三両とあった(27)。荒物と瀬戸物の売上で一割ほどになっており、荒物は江戸時代においては、なくてはならない

ものだといえよう。

(2)明治期以降の販売

明治期になると文書の中に焼き物に関わる記載が出てくる。明治一〇年(一八七七)の「思川通三拝河岸 輸出表控」(28)からは、ほぼ毎月、瀬戸(物)が益子村から上州岩鼻町や梁田郡早川田、武州埼玉郡佐波河岸、館林町などへ送られており、関東内の各所へ販売されたことがわかる。明治一六年(一八八三)に行われた「足利地方輸入品駄数調」(29)では、陸路水戸地方より荒物の記述があり、笠間焼が含まれていた可能性もある。明治一八年(一八八五)の小松原家文書「利根川汽船通運丸荷物運賃改正表」(30)では、陶器類は二級品として記載されている。明治三三年(一九〇〇)の同小松原家文書内には、「陶器(益子焼)受払ニ付 武蔵国宝珠花 かき平」や「陶器受払ニ付 岩井回漕店」の記載があり、益子焼などの販売が行われていたことがわかる。ただしこれらの記録には笠間焼や益子焼に関するものが多く、瀬戸・美濃焼や有田焼などの関東外の産地の記載が少ないことから、産地動向でも述べたとおり、陸路での見本販売と明治後期からの鉄道による販売が多かったと思われる。

江戸時代までは、大都市を除き、瀬戸物屋という名称の店は少なく、焼き物は荒物屋で売られていたことは先に述べたが、明治期以降は徐々に瀬戸物屋が登場してくる。磁器製の茶碗や皿などが、前述のとおり製造技術の改良によって大量生産が可能になり、安価に市場に出てきたため、瀬戸物だけでの商売が可能になったからである。

境町の戸籍からおこした「明治四~七年(一八七一~七四)の境町の職業・職種構成」(31)では、全一八七軒中、瀬戸物屋が一軒みられる。明治明治四三年(一九一〇)の水害を記録した『七夕の大水』(32)からは、瀬戸物屋二軒、荒物屋一軒が数えられ、増加している。

野田では、明治五年(一八七二)に行われた「瀬戸村農間諸商職取調書上帳」(33)に荒物商が二軒記載されている。明治三八年(一九〇五)の野田町全域の「野田町営業種類」(34)では全八二軒中荒物屋三軒、荒物屋と別の職種の兼業十一軒、荒物・陶器の兼業一軒、陶器と別の職種の兼業一軒と合わせて十六軒記載されており、兼業とはいえ、荒物屋、瀬戸物屋が徐々に増えているといえる。

興味深い比較がある。前述した『旧幕時代松戸宿旧絵図』に載っている「松戸宿家並絵図」と昭和五年(一九三〇)に出された松井天山作「千葉県松戸町・明村鳥瞰図」、昭和一二年(一九三七)に渡邊幸三郎氏調査による職業図の比較(35)では、江戸時代に営業していた荒物屋三四軒中、二軒が瀬戸物屋に変わっている。他の荒物屋は、玩具店、飲食店、自転車店、酒屋、洋品店、理髪店、呉服店、タイヤ店、ラジオ店などに代わり、明治期以降、昭和初期までに商店の編成が変わり、業種が細分化されていったことがわかる。

私は昭和六三年(一九八八)に県内で、瀬戸物屋の調査を行った。野田市でも三軒の調査を行ったので、その記録を紹介したい。

●K屋商店

・創業四〇〇年ほど前。七代目で、江戸時代は荒物屋、明治期に漆器と瀬戸物中心になったが、大正末期までは荒物も扱った。

・取り扱っていた瀬戸物は瀬戸焼が多く、食器は瀬戸焼が多かった。その他、有田焼(食器)、常滑焼(植木鉢・土管)、美濃焼(食器)、萬古焼(急須・火鉢・のちに洋食器)、笠間焼(甕・すり鉢)、栃木の岩舟・みかも焼(土管)。

・流通経路は鉄道がほとんど。貨物の車積みで問屋を通さず、直接産地から入ってきた。野田駅からは馬車(マルツーという運送屋)で運んだ。東京から入ってくるもの(都内に問屋をもつ産地)は舟運で、野田橋のたもとから荷揚げをした。

・客層は農家が多く、売れ筋は家庭食器と土管だった。食器は家内で使う他に田植えの際に使う茶碗などが出た。土管は、井戸を作る時に使うものと田の排水用。
・販売先は福田、梅郷、目吹が中心で、野田橋の渡し場の先埼玉県松伏町や目吹橋の渡し場の先、茨城県岩井市からも買いにきた。大きな買い物は埼玉県、流山、柏からも買いにきていた。

●T陶器店
・大正末期創業。現在、三代目。同場所で陶器店を営んでいた方より譲り受ける。前の店主がいつから創業したかは不明だが、当地に移る前に、二～三軒隣で開店していたそうなので、大正期にはその場所に移ったと思われる。
・取り扱っていた瀬戸物は食器では美濃焼が多く、続いて有田焼だった。その他、甕類（常滑焼）、花瓶・置物（九谷焼）、火鉢（信楽焼）、瀬戸焼（食器）。東北から急須・湯のみ（会津本郷焼）。
・東京の卸から、貨車に混載で入ってきた。野田市駅に貨車の荷下ろし口があり、そこから総武通運が運んだ。戦前までは大八車か、自転車リヤカーだった。貨車は、汐留と南千住で切り替えをして野田まできた。貨車は一両ごとに目的地が分かれていた。舟運の記憶はない。
・客層は農家が多い。家庭用の食器が多かったため、バラ売りに対応していた。祭りや田植え前にはまとめ買いで大量に売れた。
・販売先は近在、埼玉県越谷、春日部、金杉村（現・松伏町）、吉川村、昭和村（現・春日部市）、南桜井（現・春日部市）、関宿、流山、田中村（現・柏市）、船戸（現・柏市）、岩井（現・坂東市）

●W陶器店
・大正期に福島県平市で創業。昭和二二年（一九四七）に野田に移転。当初は、土間にむしろを敷いて直接瀬戸物を積み上げて販売していた。
・取り扱っていた瀬戸物は日常食器が中心で、磁器の茶碗や皿が多く、すり鉢も扱った。産地は瀬戸焼・美濃焼、萬古焼（半磁器）、有田焼ですり鉢は益子焼だった。その他、固焼きの土管は常滑焼、柔らかい土管が深谷（埼玉県）、笠間・真壁（茨城県）、岩舟（栃木県）。九谷焼の花瓶・置物・湯のみ、萬古焼の急須・湯のみ、信楽焼の火鉢・植木鉢・花瓶などの大物、白もの（白い磁器）の清水焼、黒ものの唐津焼・備前焼も扱っていた。
・客層は小さな農家などで、家庭の客が多く、食器は一個から一〇個くらいでバラ売りだった。
・販売先は多くは近在三里～五里四方で、春日部や柏の方からは来ない。
・流通経路は全て産地の問屋から直接購入していた。岐阜と東京の問屋から送られてきた。商品は問屋が見本を持ってきて決めた。大正期から昭和二〇年（一九四五）代まで、ほとんど鉄道での流通で、船は使用しなかった。貨車の車積みがほとんどだったが、急ぎの品は客車で送ってもらった。

江戸時代まで、街道沿いや河岸沿いに形成していた町並みは、鉄道の開通に伴い、駅周辺に展開して行く。荒物屋や瀬戸物屋も同じで、品物の輸送は鉄道になっていった。野田市で当時営業していたこの三軒の店は、江戸時代に荒物屋を開業し、のちに瀬戸物屋になっていった店と、明治期以降に開業した店があり、多くの町と同じ流れになっている。県内他地域の調査では、植木鉢販売から瀬戸物屋になった例やお茶販売店から瀬戸物屋になった例などがあり、記録と同じように事例からも明治期に瀬戸物屋が増えていったことがわかる。

また明治期の鉄道開通とともに産地の問屋の多くは東京に一旦集荷する必要がなくなり、都内に問屋を置く必要がなくなった。瀬戸物屋との直接の見本販売になり、注文を受けて商品を直送していた。野田の場合は、明治四四年（一九一一）に千葉県営鉄道が柏―野田間を開通したため、それ以降に開業した瀬戸物屋は舟運の利用自体がなくなった。

四、むすびにかえて

焼き物は昔から私達の生活にしっかりと根づいているものである。三年前、それを信じて調査を開始した。しかし、簡単に見つけられるだろうと考えていた文献になかなか焼き物の文字が出てこなかった。資料や浮世絵などで使われていたことはわかるものの、船で運ばれていたはずの焼き物がなぜ舟運の文書に出てこないのか。近世までに庶民が使っていた焼き物は荒物のひとつであり、荒物屋で販売されていたこと、舟運の書類では梱包の形状で記載することがあること、陸路による見本販売があったことなどが要因であることがわかった。また調査当初に、焼き物には多種多様な名称や種類（荒物だけでなく、瀬戸物、唐津物、陶器、陶磁器、瓦やレンガも焼き物の一種であることなど）があることを知った。そうした知識がないと調査が進まなかっただろう。

展示では、焼き物を通して近世から近代にいたる関宿周辺の人々の暮らしの一端を解き明かす目的だったが、紙面をいただき、調査で感じた疑問を発表することができ、大変嬉しく思う。また、今回と当時の調査に多大なる協力をしてくださった様々な方に感謝の念を捧げたいと思う。

註

(1) 鉾田町史編さん委員会編『鉾田町史 通史編(下)』、二〇〇一
(2) 野田市史編さん委員会編『野田市史 資料編 近現代１』、二〇一二
(3) 境町史編さん委員会編『下総境の生活史 史料編 近現代』、二〇〇四
(4) 栃木県史編さん委員会編『栃木県史史料編近現代７』、一九七八
(5) 千葉県東葛飾郡教育会『千葉県東葛飾郡史』、一九二三
(6) 前掲註(3)
(7) 前掲註(2)
(8) 山形万里子著 『藩陶器専売制と中央市場』、二〇〇八
(9) 山形万里子著 『藩陶器専売制と中央市場』、二〇〇八
(10) 作者不詳『熙代勝覧』、一八〇五頃
(11) 斎藤長秋編 長谷川雪旦画『江戸名所図会』、一八三五頃
多治見市文化財保護センター企画展「多治見の陶器商と近代の美濃焼」、二〇一一
(12) 料治熊太著『明治印判の染付』 、一九七四
(13) 前掲註(8)
(14) 古泉弘編『事典 江戸の暮らしの考古学』、二〇一三
(15) 岩下祥子(国士舘大学講師・陶磁器流通史研究)氏よりご教示
(16) 江戸時代後期に江戸十組問屋は分裂し、古組と新組に分かれ、新組には「焼物店組」が登場する
(17) 前掲註(9)
(18) 前掲註(10)
(19) 東京都立中央図書館蔵「十組奥川船積問屋場所附」より
(20) 野田市史編さん委員会編『野田市史料集 第３集』、一九六八
(21) 境町史編さん委員会編『下総境の生活史 史料編 近世Ⅲ 河岸問屋の大福帳』、二〇〇四
(22) 茨城県史編集委員会監修『茨城県史 近世編』 、一九八五
(23) 前掲註(22)
(24) 松戸市立博物館パネル「江戸時代末期の松戸宿職業構成」
(25) 東京都江戸川区編『江戸川区史 第１巻』、一九五五
(26) 春日部市郷土博物館パネル「粕壁宿宗門人別書上帳」(粕壁宿文書)より
(27) 土浦市立郷土博物館パネル「鷲宮神社境内に諸国の物資が集まった「大市」」より
(28) 前掲註(4)
(29) 前掲註(4)
(30) 前掲註(3)
(31) 境町史編さん委員会編 『町史研究 下総さかい 第二号』、一九九六
(32) 野本作兵衛・渡辺貢二著『七夕の大水』、一九七七
(33) 前掲註(2)
(34) 前掲註(2)
(35) NPO法人松戸宿振興会作「「松戸宿」家並み対照図」ホームページ
https: //sites.google.com/site/matsudosyuku/machinami-zu

（すずき・けいこ　当館主任上席研究員）